

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：33917

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820064

研究課題名（和文） 同時代資料を中心とした『太平記』の比較文学研究

研究課題名（英文） A Study on Taiheiki : Focus on Japanese-Chinese Contemporary Comparative

研究代表者

森田 貴之 (MORITA TAKAYUKI)

南山大学・人文学部・講師

研究者番号：90611591

研究成果の概要（和文）：

『太平記』の引用説話について、中国の同時代文献からの出典調査を幅広く行った。また、その説話が『太平記』の中で、どのような役割を果たしているのかについても考察した。その結果、同時代文献の断片的な影響が見られたほか、『太平記』第三部は、それ以前の『太平記』のわずかな記述や描写などを再利用する形で、物語叙述を進めていることがわかった。そして、楠正成という『太平記』第一部での重要人物についての描写が、『太平記』第三部各所にまで影響を与えていることが判明した。

研究成果の概要（英文）：

For Quoted Tales of "Taiheiki", I investigated sources from contemporary Chinese literature. In addition, I studied of Quoted Tales, about the role of in the main story of "Taiheiki". As a result, the influence of contemporary literature was observed partially. And I found that the third part of "Taiheiki" reused the depiction or description of the earlier part. In addition, I found that the depiction of about Kusunoki Masashige, a key figure in the first part of "Taiheiki", is interfering with the third part of "Taiheiki".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
2012年度	500,000円	150,000円	650,000円
総計	1,300,000円	390,000円	1,690,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学 『太平記』 和漢比較

## 1. 研究開始当初の背景

日本中世文学には、中国文学の影響が顕著であり、特に軍記物語・歴史物語は、引用説話や引用漢詩句など、多くの直接的な受容が見られる。『太平記』研究史においても、中国文学との関係は江戸時代の『太平記鈔』に始まる研究の蓄積があり、各種の注釈書の刊

行により徐々にその受容の様相は明らかになってきていた。

しかし、従来論じられてきた『太平記』の説話・詩句の出典研究は、宋代以前の経書・史書などが中心で、元代および明代の同時代資料および、筆記小説などの通俗文学、道教関連文献等については十分な調査がなされてこなかった。

それに対し、研究代表者の森田は、元代の漢詩集の調査を行い、従来出典未詳とされてきた『太平記』巻四十「高麗人来朝之事 付太元貢日本之事 并神功随三韓給之事」の引用漢詩が中国元代の漢詩集『金台集』内の一首と一致することを指摘し、同時代資料にも目を向けるべきことを述べた。

さらに、『太平記』巻三十九「山名京兆被参御方事」末尾の引用漢詩を検討し、明代詩話『蓉塘詩話』、明代筆記『堯山堂外紀』等と共通する視点で解釈されていることを指摘し、従来あまり調査の対象となつてはこなかった明代の文献もまた『太平記』研究に有益であることを述べた。

これらの発見は、『太平記』と中国の同時代資料との関わりが具体的に示されるとともに、『太平記』の記述と関連する資料の断片が、同時代資料および筆記小説などの通俗文学にも含まれている可能性を示すものであった。

この『太平記』の同時代文献受容という新たな一面への研究を継続し、さらに調査対象を、通俗文学などの領域に広げ、『太平記』出典研究の基盤を再構築し、過去の注釈や出典研究への見直しはかかっていく必要が出てきたことになる。

本研究課題は、以上の背景をもとに計画された。

## 2. 研究の目的

東アジア漢字文化圏における文物の交流の具体例として、軍記物語『太平記』における、元代・明代の中国文学受容の様相を分析することを目指した。さらにそれらの文学を受容した箇所が、『太平記』という作品内においてどのような役割を果たしているのか、という『太平記』の構想上の問題についても明らかにすることを目的とした。具体的には下記の2点の目的を設定した。

### (1) 出典未詳説話の検討

特に、本研究においては同時代文学文献や通俗文学に範囲を広げ、出典未詳箇所の調査を行い、また、他作品における同時代文献の受容実態を調査し、『太平記』との比較を行うことを第一の目的とした。その成果によって、『太平記』の成立環境および歴史叙述の特質を解明し、新たな研究基盤を構築することを目的としたものである。

具体的には『太平記』には、直接的に元代の出来事に触れる長文の説話が散見されることに着目した。『太平記』巻三十八「年号改元之事 付大元軍之事」および『太平記』巻四十「高麗人来朝之事 付太元貢日本之事 并神功随三韓給之事」がそれである。

これらの説話は、日本では『太平記』以外には見られず、独自の内容とされてきたものであり、『太平記』の成立に大きく関わると考えられる。しかし、従来、出典未詳のまま残され、大きな研究課題であった。出典の有無の調査が求められており、これらの説話を対象に、元明の文献および通俗文学を含めた出典の調査を行うことによって、『太平記』作者の周辺環境を明らかにすることを目指した。

### (2) 元関係説話の機能と書き継ぎ

次に、『太平記』が同時代の文献を用いていることが、『太平記』の歴史叙述姿勢にどのような影響を及ぼしているのか、について解明することを目的とした。

特に、上述(1)の『太平記』巻三十八「年号改元之事 付大元軍之事」および『太平記』巻四十「高麗人来朝之事 付太元貢日本之事 并神功随三韓給之事」は、いずれも『太平記』終末部に集中して配置されており、終末部の構想との関連が想定できる点に着目した。

『太平記』の中で、引用説話と歴史叙述は密接に関係しており、引用説話と史実との関連から、引用説話の『太平記』内部での機能を考察することで、『太平記』の歴史叙述構想についても解明することが可能である。

さらに、その歴史叙述構想が『太平記』内部でどのように変化しているのか、を検討することによって、『太平記』研究の大きな課題である「書き継ぎ」（作者の交代に伴う作品の継続）の問題を視野に入れることができる。

以上の問題意識を持ち、説話と歴史叙述との関連によって作品の最終成立段階での構想を明らかにすることを目指した。この問題も自ずと『太平記』成立の問題と関わってくることになる。

以上(1)(2)の研究目的は、『太平記』の漢籍受容という視点からのものであるが、『太平記』だけの個別の問題ではなく、中世の日本文学全体を覆う課題である。

『太平記』をとりあげる本研究は、東アジア漢字文化圏における文物の交流の具体例として、その解明の端緒となり、中世文学研究に貢献していくことを視野に入れたものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 出典未詳説話の検討

元代においても、宋代以前と変わらず日本との交流は盛んであり、渡来僧や入元僧が行き来し、文学への影響も小さくはなかったと

考えられている。しかし、元代の文学の日本文学・中世文学への具体的な影響の指摘はほとんどなく、『太平記』研究においても従来、調査対象とされてこなかった。そのためまずは、時代を限定することなく、幅広く関連資料を調査した。またその領域も、正史に限ることなく稗史や俗文学などにも目を向けて調査を行った。

具体的には、『遼金元詩話全編』『全明詩話』『道蔵』『歴代詩文総集（金元明篇）』『元明史料筆記叢刊』などを中心に幅広く調査を行った。

#### (2) 元関係説話の機能

『太平記』巻三十八「年号改元之事 付大元軍之事」は、『太平記』最末尾の細川頼之執事就任記事との対応が指摘されており、この記事は、『太平記』を攔筆するために用意されたものとして位置づけられる。

果たして、ここに引用された説話は、『太平記』が物語叙述を終える上で、どのような役割を果たしているのか。『太平記』全体の構想との関係を調査し、本説話と成立環境との距離を考察した。

物語内での本説話の役割の大小は、そのまま本説話の成立環境と『太平記』作者との距離の遠近を問う上でも重要な指標となる、との考えに基づいてのものである。

#### (3) 『太平記』諸本の分析

『太平記』の構想等を調査する上で、最も古態に遡りうる本文に基づいて考察する必要性に思い至った。本文研究は『太平記』研究において、欠かすことができない重要な課題である。比較文学研究の立場から作者環境に迫ろうとする本研究においても、やはり『太平記』の本文についての基礎的研究を欠くことはできない。こうした問題意識に基づき、諸本研究を行った。

具体的には、完本のなかでは最も書写年代の古い陽明文庫蔵今川家本『太平記』を調査した。本伝本は、従来の巻区分法に基づく分類である甲乙丙丁四分法によれば、乙類本に属し、後出の伝本として位置づけられるが、近年、その本文については、古態性が指摘されるなど注目されているものである。

特に巻三十六や、本研究課題で中心的に取り上げる巻三十八において、その古態性が指摘されており、適切な本文に基づいて考察を進めるためには、まずこの今川家本の性格の解明と位置づけが必要であった。『太平記』の成立研究においても、本伝本の研究は、特に重要と考え、その基本的性格を検討することとした。

## 4. 研究成果

### (1) 宋元交替説話の検討

本研究の目的は、上述の通り、東アジア漢字文化圏における文物の交流の具体例として、軍記物語『太平記』における、元代・明代の中国文学受容の様相を分析することである。当初の計画通り、『太平記』巻三十八「年号改元之事 付大元軍之事」を対象として調査を行った。

この説話は宋と元との王朝交替のきっかけとなった合戦について、詳述するものである。特に、宋側の名将である伯顔と元側の軍師である帝師とが智謀を駆使して戦う構成となっている。

このうち「宋」の名将として登場する伯顔という人物に注目した。この人物は、『太平記』第一部において楠正成が用いた作戦と類似する作戦を駆使して戦う人物として描かれており、その虚構性が指摘されてきた。さらに、「宋」の名将などではなく、本来「元」側の人物であることが知られ、その設定の意味が問題となっていた。

まず、「伯顔」なる人物について、調査を行った。同時代資料に基づく歴史的事実と比較しても『太平記』のこのような事実は見られなかった。確たる出典は未詳と言わざるを得ない。しかし、「伯顔」という人名そのものは元代においては、珍しいものではなく、ありふれたものであり、「伯顔」という名の他の人物の中には、『太平記』における楠正成に類する人物像のものも含まれることが判明した。『太平記』作者が何らかの同時代資料から「伯顔」について、知り得ていた可能性があり、楠正成と容易に結びつけられやすかったことが判明した。

さらに、『太平記』が、「元」の伯顔をあえて「宋」の伯顔として描いている理由について考察した。その結果、巻十六において、宋元の合戦が、足利・楠の合戦の先例・類似例として、『太平記』内に採用されており、そこですでに、「宋」と「楠」とが結びつけられていることに着目するに至った。つまり、『太平記』においては、楠正成を、宋元の争いにたとえる場合、敗北者である宋の側として捉えられていたということである。これが「楠正成に類似する作戦を用いる宋の伯顔」という人物を生む素地の一つとなったのではないかと考えた。

そして、その伯顔を中心に描く、この宋元交替説話が、第三部後半に持ち込まれる理由について、本章段の直後に、楠正儀の撤退が叙述されることから、本説話には、楠正成の後継者として描かれる楠正儀の敗北を暗示する役割があることを想定した。さらに、その役割が、帝師に準えられる細川頼之の登

壇によって物語を終える『太平記』終末部の構想を支えるものであることも併せて論じた。

以上、(1)の研究成果については、平成24年12月刊行の研究論文集に、論文として発表公刊した。(下記雑誌論文2.)

## (2)『太平記』書き継ぎの様態

(1)の成果によって指摘したように、巻三十八「年号改元之事 付大元軍之事」においても、暗に歴史叙述に影響を与えていると考えられている楠正成に注目した。

その存命中の活躍が描かれる第一部だけではなく、『太平記』全編において、楠正成が、重要な役割を果たしているとするならば、書き継ぎの想定されている『太平記』の成立を考える上でも、格好の指標となる非常に重要な人物であると考えられるからである。

まず、『太平記』第一部で最も著名な場面である巻九「千劍破城軍事」の楠正成像に注目し、そこでの楠正成像が、その後の『太平記』の叙述に、どのように継承されていくのかについて検証した。

その結果、この巻九で用いられている「千劍破」という地名表記が、『太平記』独特のものであること、さらに「ちはやぶる」という枕詞の表記因縁譚として、『太平記』第三部(巻二十六「宝剣執奏事 付 邯鄲午炊夢事」)に再度用いられていることがわかった。そして、その表記因縁譚を含む章段は、宝剣説話によって歴史の行く末を暗示するという点において、楠正成が怨霊となって宝剣を求めて登場する巻二十三「正成怨霊乞剣之事」と構想を一にする箇所でもあった。

これは、楠正成という人物は、第一部で死に物語から退場するが、第二部・第三部でも強く意識され続け、その後の『太平記』の歴史叙述構想を規定していることを示す格好の事例である。さらに、同様の事例が、楠正成と対照的な人物として描かれる高師直関連章段についても指摘できることがわかった。

以上のような、『太平記』が書き継ぎを行う際に、それ以前の『太平記』を参照し、再利用しながら物語を叙述していったという、作品中での影響関係の指摘は、第二部の宋元関係の記述が、第三部の宋元関係記事を規定するという、上述の研究成果(1)の想定を裏付けるものである。

以上、(2)の研究成果については、平成24年3月刊行の学術雑誌に論文として発表公刊した。(下記雑誌論文1.)

## (3)今川家本『太平記』の研究

『太平記』の様相を考える上で、諸本間の

本文異同の研究は欠くことができない。しかしながら、『太平記』は他の軍記物語同様に伝本数も膨大で、また作品自体も長大なため、十分な調査が行き届いていたとは言い難い状況にあった。とりわけ、零本を除く伝本のなかでは最も書写年代が古く、その重要性が指摘されながら、基礎的研究が進んでいなかった陽明文庫蔵今川家本『太平記』の基礎的調査を行った。

今川家本は、筆跡から複数の書写者により写されたことがわかるほか、奥書の書写年代や内題等の書写形式から、巻二十一以降の後半部分には、別の伝本から補配された巻があることが想定されていた。しかし、その補配本の素性については詳しい検討はなされてはこなかった。おもに『太平記』後半部分を取り上げる以上、その補配本文の探求は本研究課題において特に重要であった。

そこで、今川家本には、巻二十九や巻三十五において、記事の欠落が見られる点に注目し、各伝本との比較を行った結果、今川家本の欠落は、神戸大学人文科学図書館蔵の釜田本『太平記』に類する本文からの補写が行われた結果、その過程で脱落した可能性が高いことが判明した。

つまり、今後、今川家本を使用する場合、釜田本『太平記』との対校によって、補配の可能性等を念頭に研究を行う必要があることが明らかになった。

また、本伝本には、他の伝本と対校を行ったあとと見られる「余本」についての書き込みが見られた。従来、この書き込みは指摘されていたが、従来の指摘以外にも、巻二十六冒頭および巻三十二内部にも、その書き込みがあることが判明した。

これらの「余本」に関する注記を総合して、「余本」の姿を復元すると、その巻区切り位置は現存の梵舜本に最も近く、かつ、梵舜本よりも巻が一巻ずつ繰り下がったものであることがわかった。言い換えれば、巻数を調整して欠巻を埋める処理を行った梵舜本の、欠巻処理以前の形態に最も近い本と位置づけることができた。

この事実は、梵舜本の特殊な巻区分が今川家本書写の時点にまで遡る可能性を示唆するものであり、かなり『太平記』流布のかなり早い段階から、本文の流動だけではなく、巻区分の改変などが生じていたことが明らかとなった。今後の諸本研究にも寄与する発見であったといえる。

以上、(3)の研究成果については、平成24年12月に口頭発表を行った(下記学会発表1.)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 森田貴之, 「千早城と歌語「ちはやぶる」試論」, 『南山大学日本文化学科論集』, 第12号, 査読無, 2012, pp. 13-34

2. 森田貴之, 「宋の伯顔」試論—正成の残響—」, 『軍記物語の窓』, 第四集, 査読無, 2012, pp. 253-273

〔学会発表〕（計1件）

1. 森田貴之, 「今川家本『太平記』の諸問題—補配された本文を中心に—」, 名古屋中世文芸・歴史研究会（第1回）, 2012年12月15日, 中京大学名古屋キャンパス

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森田 貴之 (MORITA TAKAYUKI)

南山大学・文学部・講師

研究者番号：90611591